

## 日本語教育部門

1. 日本語研修コース及び日本語研修特別コース
2. 短期留学プログラム日本語コース
3. 全学向け日本語コース
4. 日本語能力試験対策講座
5. 共通教育科目・日本語日本事情科目
6. 福井大学博士人材キャリア開発支援センター
7. さくらサイエンスプラン・初等日本語講座

## 1. 日本語研修コース並びに日本語研修特別コース

### 《全体概要》

教員研修留学生4名を受け入れた。本コースの目的は、日本で生活する上で必要な日本語と、研究を行う上で必要な基礎的な日本語の習得である。文型・文法10コマ（1コマ90分）を基本として、漢字、作文、情報処理、文化、修了発表指導の各技能クラスがある。コース最後の修了発表会では、日本語によるプレゼンテーションを行い、自国の教育システムや自身の教育経験について紹介する。2014年度の時間割は以下のとおりである。

### 《時間割表》

	月	火	水	木	金
1	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)
2	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)
3	日本語 (情報処理)		日本語 (漢字)	日本語 (作文)	日本語 (修了発表指導)
4	日本語 (補講)		日本語 (文化)		

以下に各クラスの概要をまとめる。

### 《日本語（文型・文法）》

【受講者】4名 【授業時間】10コマ/週 総コマ数：136コマ

【担当教員】桑原陽子（コーディネータ）、澤崎幸江、敷田紀子

#### 1) 目標

留学生生活を送る上で必要な基礎的な日本語を習得する。（『みんなの日本語初級』第1課～25課）

#### 2) 方法

##### (1) 授業の進め方

- ・1限目は、全学日本語コース「日本語Ⅰ」と合同で『みんなの日本語初級』に添って学習した。2限は1限の学習項目の定着のための応用練習（日本語で話す talk-time、文型作文、中作文など）を行った。原則として2日（4コマ）で1課を終了した。1限の詳細は、全学日本語コース「日本語Ⅰ」を参照のこと。

##### (2) 成績・評価

復習テスト（15%）と期末テスト（85%）で、最終成績60点以上を合格とする。合格者は、来期全学日本語コース日本語Ⅱを、不合格者は同コース日本語Ⅰを受講する。

#### 3) 評価と課題

- ・1限は、全学日本語コースとの合同授業により活発な練習活動が実施できた。

- ・2限では、多様な学習活動を行うことにより、応用力がついた。特に talk-time を利用して自主的に学習することができた。(桑原陽子)

### 《日本語（情報処理）》

【受講者】4名 【授業時間】1コマ/週 総コマ数：13コマ 【担当教員】桑原陽子

#### 1) 目標

Microsoft word と power point の基本的な使い方を学び、修了発表の資料を作成する。

#### 2) 方法

情報処理センターの端末を使用し、Microsoft word と power point の使い方を学習した。教材は、担当教員作成のプリントである。修了発表資料を評価対象とした。

#### 3) 評価と課題

学習者に基本的なPC操作の知識があり、スムーズに学習が進められた。(桑原陽子)

### 《日本語（作文）》

【受講者】4名 【授業時間】1コマ/週 総コマ数：14コマ 【担当教員】桑原陽子

#### 1) 教科書および授業の目標

- ・6つの課題作文のプリントをもとに修了発表のためのレポートを作成する。

#### 2) 方法

##### (1) 授業の進め方

- ・修了発表および修了レポート作成のために、6つの課題を設定した。作文は、日本語（情報処理）の授業で仕上げた。
- ・課題作文 1. 私の国の先生の仕事 2. 私の国の先生と学生の日 3. 私の町と私の学校  
4. 私の学校 5. 私の仕事 6. 学校の行事

##### (2) 成績・評価

課題作文（50%）+修了レポート（50%）

#### 3) 評価と課題

作文力に差があり、特に文法の定着が悪い学習者には負担が大きかったが、修了発表という到達目標のおかげで、動機は維持でき最後まで取り組めた。(桑原陽子)

### 《日本語（漢字）》

【受講者】5名（教員研修コース4名、研修特別コース1名、すべて非漢字圏）

【授業時間】1コマ/週 総コマ数：12コマ 【担当教員】山中和樹

#### 1) 目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字 英語版』を使用して、漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット1～8の92漢字、130漢字語を習得する。

## 2) 方法

### (1) 授業の進め方

- ・原則として1コマ1ユニットで進んだ。ただし、最初の1コマで漢字の識別、成り立ちについて学習した。2コマ目から10~14字ずつ漢字を学習した。
- ・授業では、漢字の成り立ちから説明し、テキストの漢字の読み・書き練習を行ったが、画数の多い漢字はもっぱら読みの練習を行った。

### (2) 復習クイズ

- ・毎回、漢字フラッシュカードを使用し、学習済みの漢字の読みを繰り返し復習した。その直後に、各ユニットの復習クイズを実施した。主に文中における漢字語の読みをひらがなで書く問題を出題したが、数に関する漢字や画数の少ない漢字の書き問題も出題した。

### (3) 成績・評価

- ・毎回のクイズ(20%) + 期末テスト(80%)をもとに総合的に評価した。

## 3) 評価と課題

- ・今回は教員研修コースの学生4名のほかに、研修特別コースの学生も1名参加した。すべて非漢字圏であったが、漢字に興味を持ち、積極的に漢字学習に取り組む学生がいた半面、十分な成果をだせない学生もいた。(山中和樹)

## 《日本語(文化)》

【受講者】4名(エジプト・ウズベキスタン・チリ・インドネシア各1名)

【授業時間】1コマ/週 全14コマ 【担当教員】膽吹 覚(コーディネータ)、摩騰富子(華道)、柳原智子(陶芸)、福井大学教職員茶道部(茶道)

### 1) 目標

華道、陶芸、茶道について、福井県在住の指導者から直接に指導を受けて体験学習することによって、日本の伝統文化に対する理解を深める。

### 2) 授業内容

#### (ア) 華道(池坊): 7コマ

『池坊自由花入門カリキュラム』を参照しながら自由花に取り組んだ。

#### (イ) 陶芸(越前焼): 4コマ

第1回と第2回は陶芸の道具の使い方など、陶芸の基礎を学んだ上で、中皿と湯飲み茶碗を制作した。第3回と第4回は花器とランプの制作に取り組んだ。

#### (ウ) 茶道(表千家) 2コマ

本学教職員茶道部の練習に参加させていただくかたちでの実習となった。

#### (エ) 最終製作発表(1コマ)

修了発表会会場で自作の花器を持ち込み、それに各自が自由花を生けることで、この授業の成果を総合的に発表した。

### 3) 評価と課題

成績は出席状況と各講師からのご意見を総合してコーディネーターが判定した。受講生はおおむね意欲的に取り組んでいたようである。数年来の懸案であった茶道については、今年度から本学教職員茶道部のご理解とご協力が得られたことは、一つの成果であった。今後は受講生の理解を促す授業方法の工夫に努めたい。(膽吹 覚)

#### 《コース全体についての課題》

学習者間の到達度の差が大きく、日本語（補講）の時間を利用して補習を行った。しかし、それだけでは不十分で、積極的な授業への参加を維持するために、学習者の到達度にかかわらず、受講生全員に対して1ヶ月に1回程度の個別面談を行い、学習者が自身の学習をモニタリングできるような機会を設ける必要がある。(桑原陽子)

#### 日本語研修特別コース

研究留学生1名を受け入れた。本コースの目的は、日本で生活する上で必要な日本語と、研究を行う上で必要な基礎的な日本語の習得である。文型・文法10コマ（1コマ90分）が用意されている。本人の希望により日本語研修コースの漢字クラスを受講した。授業の詳細については、日本語研修コースの「日本語（文型・文法）」と「日本語（漢字）」を参照のこと。(桑原陽子)

## 2. 短期留学プログラム日本語コース

### 《概要》

このコースは、福井大学と交流協定を締結している大学等から受け入れている短期留学プログラムAコースの学生が共通科目として受講する日本語コースで、日本語・日本事情系科目10単位、伝統産業系科目2単位が必修である。

2014年前期は、2013年度に受け入れた留学生18名が日本語科目（「日本語初中級1」「日本語初中級2」「日本語中級」「日本語上級」、「はじめての作文」「はじめての会話」）および日本事情科目（「日本の文化」「応用日本語2」）を受講した。

2014年後期は、2014年度に受け入れた留学生17名が日本語科目（「日本語初級1」「日本語初級2」「日本語初中級」「日本語中級」）、日本事情系科目（「応用日本語1」、「伝統産業1」）及び「多文化コミュニケーション1」を受講した。

### ① 2014年前期

#### 《科目一覧》

科 目	教 員	教 科 書	受講者
日本語初中級1	山中和樹、市村葉子、村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	4
日本語初中級2	桑原陽子、市村葉子、村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	5
日本語中級(日本語A)	山中和樹	プリント	6
日本語中級(日本語C)	桑原陽子	『中級からの日本語プロフィシエンシーライティング』	6
日本語上級(日本語E)	桑原陽子	プリント	2
日本語上級(日本語G)	膽吹 覚	プリント	2
はじめての漢字	桑原陽子	『みんなの日本語初級Ⅰ漢字 英語版』	1
はじめての作文	山中和樹	『みんなの日本語初級やさしい作文』	0
はじめての会話	山中和樹	『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ』	8
日本事情2	膽吹 覚	『越前若狭いろはかるた』	0
日本の文化	膽吹 覚	『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化 多辺田家が行く!』	6
応用日本語2	山中和樹	プリント	2
多文化コミュニケーション2	小幡浩司	プリント	0
伝統産業2	虎尾憲史	プリント	0

## 《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限		日本事情2		日本の文化	
		多文化コミュニケーション3		多文化コミュニケーション2	
2限	日本語初中級1	日本語初中級1	日本語初中級1	日本語初中級1	
	応用日本語2				
3限	はじめての漢字		はじめての作文	はじめての会話	
		日本語中級(C)			
		日本語上級(G)			
4限	日本語初中級2	日本語初中級2	日本語初中級2	日本語初中級2	
		日本語中級(A)			
		日本語上級(E)			

## 《受講者数》

科目	国名					合計
	中国	インドネシア	韓国	台湾		
日本語初中級1	2	1	1	0	4	
日本語初中級2	4	1	0	0	5	
日本語中級（日本語A／日本語C）	5	0	0	1	6	
日本語上級（日本語E／日本語G）	0	1	0	1	2	
はじめての漢字	0	1	0	0	1	
はじめての作文	0	0	0	0	0	
はじめての会話	5	2	1	0	8	
日本事情2	0	0	0	0	0	
日本の文化	5	1	0	0	6	
応用日本語2	1	0	0	0	1	
多文化コミュニケーション2	0	0	0	0	0	
多文化コミュニケーション3	0	0	0	0	0	
伝統産業2	0	0	0	0	0	
小計	22	7	2	2	33	

## 《授業報告》

### 1. 日本語初中級1

- ・受講者：4名（中国2名、韓国1名、インドネシア1名）
- ・授業時間：4コマ/週 総コマ数：60コマ
- ・担当教員：山中和樹\*、市村葉子、村上洋子

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）  
『みんなの日本語初級Ⅱ文法解説』（同上）
- ・初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習する。
- ・日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法

2コマで1課のペースで進めた。授業は文型の導入と定着を中心とした。具体的には語彙を導入した後で、練習A・B・Cを行った。理解の困難な文型については『書いて覚える文型練習帳』を用いて、その理解と定着を図った。毎回1人ずつ短時間のスピーチを担当させて、発話能力の向上を図った。宿題は教科書の課ごとに問題の部分を課した。

##### (2) 小テスト

L26-30、31-35、36-40、41-45の計4回実施した。

##### (3) 成績および評価

期末試験（85%）、小テスト（15%）の配分で判断した。

#### 3) 評価と課題

- ・1名、体調不良で欠席がちの学生もいて、復習テストでもいい結果を得られなかったが、期末試験では、及第点を取ることができた。他の3名は、当初の授業目標に到達したといえるだろう。
- ・非漢字圏の学生もいたが、教材にも振り仮名がついていたので、特に漢字がハンディになることはなかったと思われる。ただ、読むスピードはどうしても中国人学生の方が早く、最終成績も中国人学生の方が上だった。
- ・クラス分けの時、初級クラスの成績を基に振り分ける予定であったが、学生の履修科目の関係で、能力別クラスにはならなかった。しかしながら、クラスのまとまりもよく、全体的に満足の行くクラスであった。  
(山中和樹)

### 2. 日本語初中級2

- ・受講生：5名（中国4名、インドネシア1名）
- ・授業時間：4コマ/週 総コマ数：61コマ
- ・担当教員：桑原陽子\*、村上洋子、市村葉子（\*コーディネーター）

#### 1) 目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』25課～50課を終了。初級の基本的な文法と語彙を習得し、日

常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

## 2) 方法

### (1) 教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』の取り扱い

- ・2日で1課終了。『書いて覚える文型練習帳』等の補助教材も使用した。

### (2) 教科書以外の活動

- ・課ごとに作文練習教材を作成し、まとまった文を書く練習を継続した。

### (3) 成績評価

- ・文法復習テスト（筆記）3回（15%分）＋修了テスト（26～48課）（85%分）

## 3) 評価

- ・全員授業態度は非常に良好であった。
  - ・作文練習を継続したことにより、まとまった文を書く力がついた。来期も教材を改訂して実施したい。
- （桑原陽子）

## 3. 日本語中級（日本語A）

- ・受講者6名（中国5名、台湾1名）
- ・授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・担当教員：山中和樹

### 1) 教科書及び授業の目標

- ・教科書：プリント（『日本語中級用 速読文化エピソード』より）
- ・速読により、内容把握ができるようにするとともに、文型・会話の練習を行い、コミュニケーション能力の向上を図る。

### 2) 方法

#### (1) 授業方法

1コマに1課のペースで進行した。まず、進出語彙の解説を行った。次に、黙読により内容把握をさせたあとで、音読により、学生の問題点（漢字の読み、発音等）をチェックした。その後、文法その他の重要項目の説明を行った後、練習問題や会話練習を行った。

#### (2) 評価方法

成績評価は規定の出席率を満たすことを前提として、期末試験の成績（80%）と課題提出状（20%）による。

### 3) 評価と課題

この授業は共通教育の「日本語A」との共同授業である。短プロ生は全員、漢字圏出身であり、受講者の大多数を占める中国からの非正規生と比べても、読解に特に支障は感じられなかった。読解だけではなく、出身国の事情を紹介させるなど、対話も取り入れ、短プロ生が読解以外の能力を発揮できるように工夫した。短プロ生は全員、授業態度もまじめで積極的であった。

（山中和樹）

#### 4. 日本語中級（日本語C）

- ・受講生：6名（中国5名、台湾1名）
- ・授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・担当教員：桑原陽子

##### 1) 教科書及び授業の目標

- ・教科書：由井紀久子・大谷つかさ・荻田朋子・北川幸子著『中級からの日本語プロフィシエンシーライティング』（凡人社）
- ・メールの書き方を学ぶ

##### 2) 方法

###### (1) 授業方法

教科書に沿って、メール執筆に必要な表現や文型を学ぶ。ほぼ毎回、メールを書く課題を出した。課題は合計13回であった。

###### (2) 成績及び評価

1回の課題（10点）の10回分の合計で成績を算出した。11回以上提出した場合は、点数のよいものから10回分を評価対象とした。

##### 3) 評価と課題

授業態度は非常に良好であった。典型的なメールの表現を学ぶにつれて、整ったメールを書く力がついた。（桑原陽子）

#### 5. 日本語上級（日本語E）

- ・受講生：2名（台湾1名、インドネシア1名）
- ・授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・担当教員：桑原陽子

##### 1) 教科書及び授業の目標

- ・様々なタイプのスピーチの方法を学び、わかりやすく伝えられるようになる。
- ・教材は教師の作成したプリントを使用。

##### 2) 方法

###### (1) 授業方法

4種類のスピーチを行った。（情報提供、意見、提案）。最後の提案のスピーチでは、パワーポイントを使ったプレゼンテーションとした。教師だけでなく、受講生どうしがお互いに評価を行った。

###### (2) 成績及び評価

情報提供（25%）、意見（30%）、提案（40%）の3つのスピーチと、授業への参加度（5%）を総合して評価した。

##### 3) 評価と課題

- ・授業態度は非常に良好であった。最後のプレゼンテーションの内容の質の向上のためにどのよ

うな指導を行うべきかが今後の課題である。

(桑原陽子)

## 6. 日本語上級1 (日本語G)

- ・受講者：2名 (インドネシア1名、台湾1名)
- ・授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・担当教員：膽吹 覚

### 1) 教科書及び授業の目標

- ・「be-between」(朝日新聞)
- ・日本語で書かれた新聞記事をトピックスとし、それについて日本語でディベートすることを通して、日本語による会話能力を涵養する。

### 2) 方法

#### (1) 授業方法

- ・教員主導によるトピックスの読解(1コマ)を行った後、グループ(5名1組)に分かれてディベートの役割とグループとしての戦略を協議(1コマ)し、その後、ディベートを実施した。ディベートはすべてビデオに録画し、学生指導とその評価とに使用した。

#### (2) 成績および評価

- ・計5回のディベートを総合的に評価した。

### 3) 評価と課題

- ・受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、ディベートも回を重ねるごとに上達したと判断される。グループでの協議に教員が如何に関わるかは、アクティブ・ラーニングの観点から是正の余地があると考えている。

(膽吹 覚)

## 7. はじめての漢字

- ・受講生：1名 (インドネシア1名)
- ・授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・担当教員：桑原陽子

### 1) 目標

漢字についての基礎的知識と基本の漢字100~200字程度を学習する。

### 2) 方法

#### (1) 教科書『みんなの日本語初級I 漢字英語版』

- ・1日で1課終了。1課から13課まで143字を学習。漢字熟語を読む練習と漢字を書く練習を行う。

#### (2) 成績評価：中間テスト1~10課(40%) + 修了テスト1~13課(60%)

### 3) 評価

- ・教科書以外の生活漢字を読む練習をもっと取り入れたい。

(桑原陽子)

## 8. はじめての作文（本科目の受講者なし）

### 9. はじめての会話

- ・受講者：8名（中国5名、インドネシア2名、韓国1名）
- ・授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・担当教員：山中和樹

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・教科書『みんなの日本語初級Ⅰ』、『みんなの日本語初級Ⅱ』
- ・指導教員との会話、学外での会話において、自分、趣味、専門などについて話せるように表現や語彙を習得する。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法

教科書の各課の会話のビデオをまず見て、内容を理解する。次に教科書を見て内容を確認する。次に、各課で扱われている文法項目を含む文を、教科書を見ないで、言えるようにする。それから、その課の教授項目の表現を使用して、指導教員や他の学生と自由な会話の練習をする。最後に、ビデオを見て、ビデオの内容について教師が質問し、学生がそれに答える練習をする。

初めに『みんなの日本語初級Ⅰ』を復習した。初級の初めの方は1日に4～5課扱った。学習が進むにつれて1日3～4課のペースになった。

#### 3) 評価と課題

- ・期末試験（個別の会話試験）の得点による。出席・授業態度とも良好であった。履修生のほかに聴講生が1名、合計9名のクラスになったので、個別の会話練習がどうしても不足してしまったことが反省点である。

(山中和樹)

## 10. 日本事情2（本科目の受講者なし）

### 11. 日本の文化

- ・受講者：6名（インドネシア1名、中国5名）
- ・授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・担当教員：膽吹 覚

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化』（アルク）
- ・日本にホームステイした留学生の目を通して、日本の季節感や、日本人家庭の様相、日本人の考え方について学んだ。

2) 方法

(2) 授業方法

- ・ 1 課につき 1 コマのペースで行った。教科書の設問に沿って進めた

(2) 成績および評価

- ・ 期末試験 (100%)

3) 評価と課題

- ・ 受講生はおおむね授業を理解できたようである。また、積極的に発話し、受講生間での議論も盛んであった。 (膽吹 覚)

## 12. 応用日本語 2

- ・ 受講者：1 名 (中国 1 名)
- ・ 授業時間：1 コマ/週 総コマ数：15 コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント  
日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養うとともに、語彙力、理解力、表現力の向上を図る。

2) 方法

(1) 授業方法

導入として、新聞記事の黙読を行い、大意を把握させた。次に、教師が音読した。それから、学生に 1 文ずつ、順番に音読させた。その後、新しい文法事項や発音の問題点などを解説し、本文の内容質問等を行った。各回 1 つの記事を読み切り、次回にその内容に対する試験 (記述試験) を実施した。

(2) 小テスト

各項目終了後、実施。全 8 回。  
答案は実施の次週に採点返却し、解答例を配布した。

(3) 中間テスト

電話応対試験 (筆記)、記述式) 実施。

(4) 成績及び評価

期末試験 (30%)、中間テスト (50%)、小テスト (20%)。

3) 評価と課題

- ・ 共通教育科目「応用日本語 I」との合同クラスであり、受講者全 32 名中 1 名が短プロ生である。短プロ生の日本語のレベルは中級レベルであったが、日本語能力試験 N-1 に合格したのものもいる中国からの特別聴講学生と比べても、ハンディは感じられなかった。最終結果も十分満足の行くものであった。
- ・ 電話応対や名刺交換の実地練習は、今回も全体の人数が多かったので、練習できなかった。細

かい指導ができなかったことが反省点である。

(山中和樹)

### 13. 多文化コミュニケーション2 (異文化コミュニケーション2)

【受講生】台湾1名

【授業時間】1コマ/週 総コマ数：15コマ 【担当教員】小幡浩司

#### 1) 目標

人はコミュニケーションから逃れることは出来ない。また、コミュニケーションは自文化の影響から逃れることは出来ない。したがって、異なる文化背景を持つ人々のコミュニケーションにおいては、まず自文化の特性、次いで相手の異文化の特性、さらにコミュニケーションに及ぼす文化の影響を理解することが必要である。

この授業では、文化、およびコミュニケーションについて基礎的理論を概観するとともに、具体的事例を通して、異文化コミュニケーションに必要な態度、およびコミュニケーションスタイルについて議論し、その理解を深める。

#### 2) 方法

##### (1) 授業内容

授業は配布資料をもとに講義、ディスカッションから成る。学習内容は、①文化と多文化世界、②自文化とコミュニケーション、③自文化中心主義と文化相対主義、④非言語コミュニケーション、⑤言語コミュニケーション、⑥ステレオタイプ、偏見、差別、⑦コミュニケーションと異文化理解、⑧グローバルゼーションとアイデンティティ、など

##### (2) エッセイ

エッセイトピックは、「自己とアイデンティティ」、「ステレオタイプ、偏見、そして差別」、「異文化への憧れ」、「文化の対立」、「異文化の対話」、「あなたの国の文化的特徴」、「異文化適応と異文化受容」など

##### (3) 成績及び評価

成績は、出席率を満たすことを前提とし、下記①～④から総合的な評価を行った。

- ①中間試験 (Take Home Exam)
- ②期末試験① (Take Home Exam)
- ③期末試験② (In Class Essay)
- ④授業に対する積極的参加

#### 3) 評価と課題

文化の特徴をさらに掘り下げて議論した。異文化への憧れ、そして、文化の「重い」側面である異文化間対立などのトピックでは、学生のディスカッションがかなり活発に展開された。エッセイにおいては、文章力、クリティカルシンキング、そして論理展開力が弱いと改めて感じた。反省点は、授業において講義が多くなってしまったことである。もう少し、資料や映像を用いて、ディスカッションをする時間を増やすなど、学生達による能動的な学びのチャンス

を作るべきであったと考える。

(小幡浩司)

#### 14. 伝統産業 2 (本科目の受講者なし)

##### ② 2014年後期

##### 《科目一覧》

科 目	教 員	教 科 書	受講者
日本語初級 1	山中和樹、市村葉子、 星 摩美	『みんなの日本語初級 I』	4
日本語初級 2	山中和樹、市村葉子、 村上洋子	『みんなの日本語初級 I』	9
日本語初中級	膽吹 覚、村上洋子、 市村葉子	『みんなの日本語初級 II』	5
日本語中級(日本語 B)	山中和樹	プリント	0
日本語中級(日本語 D)	膽吹 覚	『マンガで学ぶ日本語会話術』	0
日本語上級(日本語 F)	桑原陽子		0
日本語上級(日本語 H)	山中和樹		0
日本事情 1	膽吹 覚	『留学生のための時代を読み解く上級 日本語』	0
応用日本語 1	山中和樹	プリント	0
多文化コミュニケーション 1	小幡浩司	不明	0
伝統産業 1	虎尾憲史	なし	18

##### 《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1 限	応用日本語 1			多文化コミュ ニケーション 1	
2 限	日本語初級 2	日本語初級 2	日本語初級 2	日本語初級 2	
		日本事情 1			
3 限	日本語初級 1	日本語初級 1			
	日本語初中級	日本語初中級			
		日本語中級(D)			
		日本語上級(H)			
4 限		日本語中級(B)			
		日本語上級(F)			

## 《受講者数》

科目	国名		
	中国	インドネシア	韓国
日本語初級 1	4	0	4
日本語初級 2	8	1	9
日本語初中級	5	0	5
日本語中級（日本語B／日本語D）	0	0	0
日本語上級（日本語F／日本語H）	0	0	0
日本事情 1	0	0	0
応用日本語 1	0	0	0
多文化コミュニケーション 1	0	0	0
伝統産業 1	17	1	18
小計	34	2	36

## 《授業報告》

## 1. 日本語初級 1

- ・受講者：4名（中国4名）
- ・授業時間：4コマ／週 総コマ数：58コマ
- ・担当教員：山中和樹\*、市村葉子、星 摩美（\*コーディネーター）

## 1) 教科書及び授業の目標

- ・テキスト『みんなの日本語初級 I』25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。
- ・ひらがな・カタカナの導入と定着

## 2) 方法

## (1) 授業方法

- ・1課を2コマで行った。
- ・テキストの問題をほぼ毎回、宿題にして文法及び語彙の定着を図った。

## (2) 復習テスト：3回実施（6～7課ごとに1回）

## (3) ひらがな・カタカナの導入

- ・ひらがなとカタカナはだいたい学習済みだったが、最初の11コマでそれぞれの清音・濁音・拗音・長音・促音・撥音、カタカナ特殊音の指導を行った。

## (4) ディクテーション

- ・各課が終了した次の回で語彙テストおよびディクテーションを行った。

(5) 評価

- ・復習テスト3回(20%)＋期末テスト(80%)の結果をもとに評価した。

3) 評価と課題

- ・初級レベルの学生は13名だったので、成績別に2クラス編成をした。ただし、時間割の関係で、完全にレベル別にはならなかったが、このクラスは初級レベルでも日本語学習歴のほとんどない学生が中心であった。しかしながら、本来なら初級2クラスに入るべき学生が1名いた。他の3人とはレベルに差があり、やや退屈そうな様子もあったが、クラスの雰囲気乱すようなことはなかった。
- ・授業開始前のひらがなテスト(清音43文字)では、43点満点で、満点の学生が2名いた半面、8点しか取れていない学生もいた。カタカナテスト(清音43文字)では、満点に近い学生が1名いたが、8点しか取れていない学生もいた。文字学習が遅れていた学生は期末テストの成績も満足に行くものではなかった。
- ・課題の提出も欠かさず、まじめに勉強していたものの、理解にやや時間がかかる学生もいた。最終的には全員合格したものの、一部の学生の成績はけっして、満足できるものではなかった。
- ・全員ほとんど毎回出席したので、受験資格である3分の2以上の出席について問題はなかった。
- ・昨年度は、教科書が改訂されたが、ディクテーション用の絵教材が旧版のままだったので、ディクテーションは実施しなかった。今年度は、ディクテーションの問題も新版に対応したものに變更して、ディクテーションを課した。(山中和樹)

2. 日本語初級2

- ・受講者：9名(中国8名、インドネシア1名)
- ・授業時間：4コマ/週 総コマ数：58コマ
- ・担当教員：山中和樹\*、村上洋子、市村葉子(\*コーディネーター)

1) 教科書及び授業の目標

- ・テキスト『みんなの日本語初級I』25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。
- ・ひらがな・カタカナの導入と定着

2) 方法

(1) 授業方法

- ・1課を2コマで行った。
- ・テキストの問題をほぼ毎回、宿題にして文法及び語彙の定着を図った。

(2) 復習テスト：3回実施(6～7課ごとに1回)

(3) ひらがな・カタカナの導入

- ・ひらがなとカタカナは、おおむね学習済みだったが、1名はほとんど何も書けなかったため、最初の11コマでそれぞれの清音・濁音・拗音・長音・促音・撥音、カタカナ特殊音の指導を行った。

(4) ディクテーション

- ・各課が終了した次の回で語彙テストおよびディクテーションを行った。

(5) 評価

- ・復習テスト3回(20%)＋期末テスト(80%)の結果をもとに総合的に判断した。

3) 評価と課題

- ・初級レベルの学生は13名だったので、成績別に2クラス編成をした。ただし、時間割の関係で、完全にレベル別にはならなかったが、このクラスは初級レベルでもいくらか日本語を学習してきた学生からなっている。その中に1名、非漢字圏で文字習得もほとんどできていない学生がいた。
- ・授業開始前のひらがなテスト(清音43文字)では、1名を除き、43点満点で、満点またはほとんど満点であった。カタカナテスト(清音43文字)でも、事情は同様であった。
- ・総じて、まじめで明るく、楽しい雰囲気のクラスであった。文字習得の遅れていた学生も含め、最終的には全員、満足のいく成績を取れた。
- ・全員ほとんど毎回出席したので、受験資格である3分の2以上の出席について問題はなかった。
- ・昨年度は、教科書が改訂されたが、ディクテーション用の絵教材が旧版のままだったので、ディクテーションは実施しなかった。今年度は、ディクテーションの問題も新版に対応したものに變更して、ディクテーションを課した。(山中和樹)

3. 日本語初中級

- ・受講者：5名(中国5名)
- ・授業時間：4コマ/週 総コマ数：56コマ
- ・担当教員：膽吹 覚\*、市村葉子、村上洋子

1) 教科書及び授業の目標

- ・『みんなの日本語初級Ⅱ』(スリーエーネットワーク)  
『みんなの日本語初級Ⅱ文法解説』(同上)
- ・初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習する。
- ・日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。

2) 方法

(1) 授業方法

プレースメント・テストの結果を受けて、第14課から開始し、最終的には第48課まで導入した。基本的には2コマで1課のペースで進めたが、一部は1コマ1課とした。授業は文型の導入と定着を中心とした。具体的には語彙を導入した後で、練習A・B・Cを行った。理解の困難な文型については『書いて覚える文型練習帳』を用いて、その理解と定着を図った。会話はこのクラスではしなかったが、毎回1人ずつ1分間スピーチを担当させて、会話能力の向上を図った。宿題は課ごとの「問題」の部分で課した。

(2) 小テスト

第26～30課、第31～35課の計2回実施した。

(3) 成績および評価

期末試験（90%）、小テスト（10%）の配分で判断した。

3) 評価と課題

今期は受講生の既習状況から見て、第14課から開始した。結果的にはこの判断が功を奏して授業は円滑に進み、受講生の理解も定着としたと見てよいだろう。小テストが2回しかできなかったことは惜しまれるが、授業時間の確保の観点からやむを得ないと考えている。総体的に見て円滑かつ適切な授業ができたと考えている。(膽吹 寛)

4. 日本語中級（日本語B/D）（本科目の受講者なし）

6. 日本語上級（日本語F/日本語H）（本科目の受講者なし）

7. 日本事情1（本科目の受講者なし）

8. 応用日本語1（本科目の受講者なし）

9. 多文化コミュニケーション1（本科目の受講者なし）

10. 伝統産業1

- ・受講生：18名（中国17、インドネシア1）
- ・訪問見学回数：6回（1回の見学は授業3コマ相当）
- ・担当教員：虎尾憲史

1) 目標

伝統産業が地域や日本全体の産業技術の発展にどのように関わっているのか。家内工業から出発した伝統産業がグローバル化にどう対処しているのか。伝統産業を守り、発展させながら、次世代への技術継承をどのようにしているか、など、日本の現代産業の基盤となった伝統産業の見学を通して現代日本社会の理解を深めると共に、伝統産業への理解を通して福井への理解も深め、留学地福井への愛着や郷土意識をも醸成する。

2) 方法

- ・福井の伝統工芸である、「越前和紙」「越前竹人形」「越前打刃物」「越前焼」「越前漆器」等の創作生産現場を6箇所訪問見学する。工房では伝統工芸の歴史、技術、後継者育成、課題等について専門家（伝統工芸士）の話を聞く。更に、研修施設において、和紙、竹とんぼ、移植小手、蕎麦打ち、絵付けなどの実習も行う。6回の訪問について毎回レポートを提出してもらい、理解の深まりを確認する。

- ・成績評価：見学訪問先ごとに提出される報告書に基づき評価する。

### 3) 評価と課題

- ・生産現場を直接訪問し、伝統工芸士から話を聞くことに加え、実習も行うので、講義等では得がたい、深い理解と確かな知識が得られている。
- ・過去には、若狭地方、加賀地方の伝統産業見学も行われていたのに、2006年度よりバス片道1時間圏内の福井市郊外に見学先を限定することとなっているようだが、今年度中には舞鶴若狭自動車道の開通で嶺南地方へのアクセスが改善されているので、次年度には若狭地方の伝統産業見学の復活を図りたい。
- ・この科目は短プロ生以外の参加が許されていないが、その他の留学生からの要望は多く、少しでも多くの留学生に伝統産業の見学機会を提供できるようにすることも課題の一つと考える。

(虎尾憲史)

### 《むすび》

2014年度は、前期に中国、インドネシア、韓国、台湾の4カ国、後期に中国、インドネシアの2カ国からの留学生が短期留学プログラムの日本語・日本事情科目及び伝統産業科目を受講した。2014年前期開講科目は、昨年度と同様、「日本事情2」、「多文化コミュニケーション2」、「多文化コミュニケーション3」及び「伝統産業2」が受講者ゼロであった。さらに、これらに加えて、「はじめての作文」も受講者がゼロになった。「伝統産業2」の受講者がゼロであった理由は次のとおりである。「伝統産業」については、「伝統産業1」（後期開講）か「伝統産業2」（前期開講）のどちらかを履修することになっているが、2006年度より、見学先が福井市郊外に限定されたため、見学先の確保が難しく、実質、後期のみの開講になっていることによる。2014年度後期は、新規に受け入れた18名のうち、初級が13名、初中級が5名で、中級以上の学生はいなかった。その結果、中級以上のレベルが要求される、「日本語中級」、「日本語上級」、「応用日本語1」、「日本事情1」や「多文化コミュニケーション1」の履修者がゼロになった。

(山中和樹)

### 3. 全学向け日本語コース

#### 1. 概要

本コースは本学で学ぶすべての留学生及び外国人研究者を対象として開設された日本語の補講コースである。本年度は例年通り前後期ともに日本語Ⅰ～Ⅳの4クラスを開講した。

#### 2. 開講科目と教科書

- ① 日本語Ⅰ（後期）……『みんなの日本語初級Ⅰ』（スリーエーネットワーク）
- ② 日本語Ⅱ（前期後期共通）……『みんなの日本語初級Ⅱ』（同上）
- ③ 日本語Ⅲ（前期後期共通）……『みんなの日本語中級Ⅰ』（同上）
- ④ 日本語Ⅳ（前期）……『中級を学ぼう 中級中期』（スリーエーネットワーク）  
日本語Ⅳ（後期）……『わたしの見つけた日本』（東京大学出版）

#### 3. プレースメント・テスト

前期：2014年4月11日（金） 受験者数16名

後期：2014年10月10日（金） 受験者数16名

#### 4. 継続受講者数

		日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
前期	登録可能数	4	12	5	9	30
	登録数	2	14	3	4	23
	登録率	50	86	60	44	77
後期	登録可能数	1	8	12	17	38
	登録数	0	3	4	5	12
	登録率	0	38	33	29	32

#### 5. 受講登録者数

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
前期	6	14	13	13	46
後期	12	8	8	9	37

## 6. 授業報告

### 《前期》

#### ① 日本語Ⅰ

- ・受講者：6名（イタリア2名、ラオス1名、バングラデシュ1名、パプアニューギニア1名、アメリカ1名）
- ・授業時間：4コマ/週 合計56コマ
- ・担当教員：澤崎幸江\*、敷田紀子、高瀬公子
- ・コーディネーター：桑原陽子
- 1) 教科書及び授業の目標
  - ・教科書：『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説版』（スリーエーネットワーク）
  - ・目標：日本語の基礎的な語彙と文法を習得し、簡単なコミュニケーションができるようになる。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法

1課から25課まで、1課をおおよそ2回で終えるペースで授業を進め、また、教科書の復習A～Gに合わせて、復習の授業も5回行った。また、主に第1週目にはひらがなを、第2、3週目にはカタカナを学習した。

##### (2) 復習テスト・期末テスト

期間中3回復習テストを実施し、受講生の学習事項の定着状況を確認し、その結果に基づいて、適時解答、解説を行った。ひらがな、カタカナについても定着状況を確認するための小テストをそれぞれ実施した。学期末にはまとめとして期末テストを実施した。

##### (3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで復習テスト各5%、期末テスト85%に換算して総合点で総合成績を判断した。

#### 3) 評価と課題

今学期の特徴として、6名の受講生のうち3名が大学教員であったことがあげられる。仕事の関係上毎回授業に出席するのは難しかったが、非常に真面目な授業態度で、ほかの学生のよい見本となってくれていた。残り3名の学習者はいずれも再履修生である。以前学習した内容の復習という側面もあり、学習は比較的スムーズに進んだ。ただ、動詞のフォームや助詞の定着には時間がかかり、ひらがな・カタカナの文字を学習するのに苦労する学生もいた。今学期より、授業が週4回になり、授業回数が減少したため、教科書前半は少しペースを速めて学習を行い、フォームが多く出てくる14課以降は時間をとって学習するなどの工夫を行ったが、応用練習を行う時間があまりなかったのは残念である。（澤崎幸江）

#### ② 日本語Ⅱ

- ・受講者：14名（中国7名、フィリピン2名、フランス1名、ミャンマー1名、バングラデシュ

1名、ルーマニア1名、アメリカ1名)

- ・授業時間：4コマ/週 56コマ
- ・担当教員：澤崎幸江、敷田紀子、高瀬公子\*
- ・コーディネーター：桑原陽子

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・『みんなの日本語初級Ⅱ』『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説』(スリーエーネットワーク)
- ・初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法

学習範囲は『みんなの日本語Ⅱ』の26～50課で、基本的に1課を2コマで終了することとした。但し、今期より授業が週4コマになったため、28、34、38、45、46課は1コマで行った。また、5課毎に復習、復習テストの前にその範囲の復習、50課終了後に総復習、計8回復習の時間を設けた。授業では、その日に導入した文法項目を基本練習から応用まで行った。副教材は主に『文型練習帳』『聴解タスク』及び会話ビデオを活用し、表現の定着や会話力の向上を図った。また、漢字は非漢字圏と漢字圏の学生に対し、異なった教材を使った。非漢字圏の学生には『みんなの日本語初級Ⅰ漢字英語版』の漢字を1日5～6字フラッシュカードで読む練習をし、2ユニット毎にプリントで復習させた。一方、漢字圏の学生には教科書の進度に合わせ、『みんなの日本語初級Ⅱ漢字英語版』及び『みんなの日本語初級Ⅱ漢字練習帳』からの漢字プリントを使用した。

##### (2) 復習テスト・期末テスト

復習テストは26～33課、34～42課の2回行った。テスト後に解答、解説し、習得が不十分と思われる個所の指導をおこなった。敬語をテスト範囲に加えるのは学習者の負担が大きいと判断し、期末テストの範囲は26～48課とした。漢字の学習意欲を高めるために復習テスト、期末テスト共に漢字の読みを10問出題した。漢字圏は読みを書かせる問題、非漢字圏は読みの4択問題とし、配点には含まず100点+10点のように表示した。

##### (3) 成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テストは各10%、期末テストは80%に換算して総合点で判断した。

#### 3) 評価と課題

今期は14名の受講申請者のうち、11名が80～100%と出席率がよかった。多国籍で漢字圏、非漢字圏の学生がほぼ半々で、和やかな雰囲気ですべての授業が進められた。授業中は皆まじめで、熱心且つ協力的に学習に取り組み、学習したことを使って、いろいろ表現しようという意欲が見られ、着実に力をつけていった。

(高瀬公子)

### ③ 日本語Ⅲ

- ・受講者：13名（中国10名、台湾1名、モンゴル1名、フランス1名）
- ・授業時間：4コマ/週 56コマ
- ・担当教員：市村葉子、齋藤ますみ、村上洋子、小野知恵美\*
- ・コーディネーター：膽吹 覚

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・『みんなの日本語中級Ⅰ』『みんなの日本語中級Ⅰ翻訳・文法解説』（スリーエーネットワーク）
- ・中級前期レベル者を対象とし、初級から中級への橋渡しに必要な総合的な日本語力を養う。機能に注目した会話表現を身につけ、場面に合った表現を用いることが出来るようになる。

#### 2) 方法

##### (1) 授業

1課を4コマで進めた。「話す・聞く」「読む・書く」の前に、それぞれの文法項目を学習し、1日目～3日目は文法と「話す・聞く」、4日目は「読む・書く」という内容で進めた。語彙については、文法、「話す・聞く」では授業の最初にその日の新出語彙を導入し、「読む・書く」では前の時間に語彙の導入とことばのチェックをすませた。2課終了毎に教科書の「問題」を用いて復習し定着を図った。中間、期末テストの前には、該当課の復習時間を設けた。漢字については、『みんなの日本語初級Ⅱ漢字練習帳』の「ユニットクイズ」を進め、終了後は『みんなの日本語中級Ⅰ』の読み物の語彙を中心に、読み練習を行った。

##### (2) テスト

全12課を半分に分け、1～6課で中間テスト、7～12課で期末テストを行った。

##### (3) 成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、中間テスト、期末テスト各50%ずつに換算し総合点で判断した。

#### 3) 評価と課題

登録した13名のうち、数名が研究や専門の授業の関係等で途中から授業に来られなくなっていき、期間の中頃に受講生は8名になった。8名の中にも週1、2日しか受講できない学生が多く、毎日出席できる学生はほとんどいなかったが、皆授業に積極的に参加し、楽しく学習を進める良い雰囲気だった。また、そのような受講状況の中でも、進度は順調で授業はほぼ予定通り進めることができた。今期は、受講生のレベル差も大きくなく、受講を続けた学生が漢字圏ばかりだったこともあり、授業を進める上で混乱は見られなかったが、今後も受講生に合わせた対応は必要になると思われる。

(小野知恵美)

### ④ 日本語Ⅳ

- ・受講者：13名（中国10名、韓国1名、オーストリア1名、アメリカ1名）
- ・授業時間：4コマ/週 合計57コマ
- ・担当教員：高瀬公子、星 摩美、齋藤ますみ\*

・コーディネーター：山中和樹

### 1) 教科書及び授業の目標

・教科書：『中級を学ぼう 中級中期』（スリーエーネットワーク）

・中級後期以上のレベル者を対象にし、中・上級に必要な「話す・聞く」「読む・書く」の総合的な言語能力を培う。

### 2) 方法

#### (1) 授業及び試験

10課構成の教科書を、1課を4回に分けて行った。各課終了時は、その課の題材の作文を書き、提出することとした。生教材や視聴覚教材を使用し教科書以外のテーマを扱う「活動」の時間を設け、計13回行った。この時間には漢字学習も含めた。試験は、作文を含めた期末試験の1回のみとした。

#### (2) 漢字学習

上記で述べたとおり、各「活動」の時間に行った。『漢字から学ぶ語彙2』（アルク）から抜粋し、使用した。

#### (3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、提出物、及び、期末テストで判定した。

### 3) 評価と課題

全体的に、意見を活発に出し、活動的なクラスであった。学習者にレベル差はあったものの、シラバス及びクラス運営を工夫し、大きな問題はなかった。各課のまとめとして書いた作文は、発表時などは、もう少し時間を取り、成果をあげるべきだったと考える。今後の課題にしたい。

(齋藤ますみ)

## 《後期》

### ① 日本語 I

・受講者：12名（中国4名、アメリカ2名、イタリア、タンザニア、エチオピア、ケニア、バン  
グラデシュ、インドネシア各1名）

・授業時間：5コマ/週 63コマ

・担当教員：桑原陽子（コーディネーター）、澤崎幸江、敷田紀子

#### 1) 教科書及び授業の目標

・教科書『みんなの日本語初級 I』『みんなの日本語初級 I 文法解説書』

・日本語で簡単な口頭でのコミュニケーションができるようになる。

・日本語のひらがな・カタカナの読み書きができるようになる。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法

1課をおよそ2日で終えるペースで学習した。副教材として、適宜聴解や文型練習プリント

類を使用した。

## (2) 復習クイズ

学生の習得状況を確認するため、3回の復習クイズを実施した。

## (3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、復習クイズ15%と期末試験85%として評価した。

## 3) 評価と課題

学習者の背景が多様でよい雰囲気でも活発な活動ができた。ただ、そのように背景が多様な学習者が増えると、これまでの授業内容と評価方法を見直す必要がある。たとえば文字に極力頼らず、会話中心のクラスが1つあれば、学習者の多様性に対応できると思う。(桑原陽子)

## ② 日本語Ⅱ

- ・ 受講者：8名(中国3名、イタリア2名、パプアニューギニア1名、バングラデシュ1名、アメリカ1名)
- ・ 授業時間：4コマ/週 54コマ
- ・ 担当教員：小野知恵美、市村葉子、高瀬公子\*
- ・ コーディネーター：桑原陽子

## 2) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語初級Ⅱ』『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説』(スリーエーネットワーク)。今学期より第2版を使用
- ・ 初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

## 2) 方法

### (4) 授業方法

学習範囲は『みんなの日本語Ⅱ』の26～50課で、基本的に1課を2コマで終了することとした。但し、授業が週4コマになったため、28、32、34、38、45、49、50課は1コマで行った。復習は5課毎に1コマ、復習テストの前に1コマ、50課終了後に総復習を2コマ、計9コマ設けた。授業では、その日に導入した文法項目を基本練習から応用まで行った。副教材は主に『文型練習帳』を活用し、会話ビデオも利用できる場合は使い、表現の定着や会話力の向上を図った。また、漢字は非漢字圏と漢字圏の学生に対し、異なった教材を使った。非漢字圏の学生には『みんなの日本語初級Ⅰ漢字英語版』の漢字を1日5～6字フラッシュカードで読む練習をし、2ユニット毎にプリントで復習させた。一方、漢字圏の学生には教科書の進度に合わせて、『みんなの日本語初級Ⅱ漢字英語版』及び『みんなの日本語初級Ⅱ漢字練習帳』からの漢字プリントを使用した。

### (5) 復習テスト・期末テスト

復習テストは26～33課、34～42課の2回行った。テスト後に解答、解説し、習得が不十分と

思われる個所の指導をおこなった。敬語をテスト範囲に加えるのは学習者の負担が大きいと判断し、期末テストの範囲は26～48課とした。漢字の学習意欲を高めるために復習テスト、期末テスト共に漢字の読みを10問出題した。漢字圏は読みを書かせる問題、非漢字圏は読みの4択問題とし、文法問題とは別に100点+10点のように表示した。

#### (6) 成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テストは各10%、期末テストは80%に換算して総合点で判断した。

#### 3) 評価と課題

今期はオリエンテーションを充実させ、全員が確実に復習テストを受けられるよう配慮した結果、8名のうち7名が受験した。また、6名が78～100%と出席率がよかった。漢字圏、非漢字圏の学生がほぼ半々で、和やかな雰囲気です授業が進められた。非漢字圏の学習者の漢字学習意欲が高く、途中から漢字圏用のプリントも使用した。授業中は皆まじめで、熱心且つ協力的に学習に取り組み、学習したことを使って、いろいろ表現しようという意欲が見られた。(高瀬公子)

### ③ 日本語Ⅲ

- ・ 受講者：8名(中国4名、フィリピン1名、ルーマニア1名、バングラデシュ1名、ミャンマー1名)
- ・ 授業時間：4コマ/週 合計57コマ
- ・ 担当教員：小野知恵美、齋藤ますみ\*、高瀬公子
- ・ コーディネーター：膽吹 覚

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語 中級Ⅰ』(スリーエーネットワーク)  
『みんなの日本語 中級Ⅰ文法解説書』(スリーエーネットワーク)
- ・ 中級前期レベル者と対象にし、初級から中級への橋渡しに必要な「話す・聞く」「読む・書く」の総合的な言語能力を培う。

#### 2) 方法

##### (3) 授業

1課を約3コマで進めた。1コマの学習時間は90分である。教科書の「話す・聞く」、「読む・書く」の項目はそれぞれ事前に語彙、文法を導入し、練習を行った。2課終了毎に教科書の「問題」で復習し、定着を図った。又、中間、期末テストの前には復習の時間を設けてテストに備えた。

##### (2) 漢字学習

非漢字圏学習者は、『みんなの日本語初級Ⅱ 漢字練習帳』より、漢字圏学習者は、『みんなの日本語 中級Ⅰ』の「3. 読みましょう」の漢字語彙を取り上げた。両者ともプリントを用い、読み練習を中心に行った。

### (3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、中間、期末テストで判定した。

#### 1) 評価と課題

8名のうち、4名が非漢字圏の学生で漢字圏の学生と混在クラスであった。中級レベルになると漢字語も多くなり、特に非漢字圏の学生はついていくのが困難な様子であった。しかしながら、諸処の事情により、期末試験は受験出来なかったものの、学期の最後まで皆出席し、真摯に授業を受けた学生もいた。大いに評価したい。混在クラスの場合、レベルに差があり、クラス運営が難しい面もあるが、異文化を共有するという点では、多いにメリットもあると思う。今期は非漢字圏学習者の負担を考慮し、テスト問題から漢字を省いた。反省会では、授業での漢字の進め方を含め、教授法を再検討し、来期からは試験問題にも組み込むよう申し合わせた。(齋藤ますみ)

### ④ 日本語Ⅳ

- ・受講者：9名（中国7名、韓国1名、アメリカ1名）
- ・授業時間：4コマ/週 合計53コマ
- ・担当教員：高瀬公子、齋藤ますみ、星 摩美
- ・コーディネーター：山中和樹

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・教科書：『わたしの見つけた日本』（東京大学出版）
- ・中級中期～後期レベルを対象とし、4技能の力を総合的に伸ばすことを目標とした

#### 2) 方法

##### (4) 授業

初めて使用する教材で、1課を6回で進めることとした。再履修者と日本語Ⅲからの進級者のレベルの差を考慮し、表現活動（話す・書く）に十分な時間をとり、学習者が自分のレベルに合わせたレベルで表現活動を行えるようにすることを目指した。授業の進め方は基本的には教科書に沿い、以下のとおり進めるよう計画した。

- ・1時間目：語彙・漢字の導入、初級文法の復習、本文の内容の把握
- ・2時間目：本文前半の精読、新出の文法表現の導入と練習
- ・3時間目：本文後半の精読、新出の文法表現の導入と練習
- ・4時間目：聴解
- ・5時間目：会話、作文
- ・6時間目：応用読解

#### (2) 漢字学習

今回は非漢字圏の学習者が2名いたため、漢字については教科書で重要語彙とされているものの読みを中心に指導した。読んで意味が理解できるようにすることを目指した。

### (5) 成績評価

期末テスト1回と平常点で判定した。

### 3) 成果と課題

受講生の授業への取り組みはとても熱心で、積極的に課題に取り組んでいた。ただ、授業との重なりや研究活動、就職活動で継続して出席できない受講生が多い。そのため、欠席者のために内容の復習に時間が割かれ、進度の変更を余儀なくされる場合も多かった。再履修者と、日本語Ⅲから進級した学生の間でレベル差があり、学期はじめにそれに対処できるよう計画した。しかし、今回の採用した教材は再履修者には少しレベル的に物足りないという声も聞かれた。非漢字圏学習者のために漢字の学習を入れた。今回使用した教材は、すべての漢字には振り仮名がついている本文と、ついていない本文が両方つけられており、それは個々の学習者が自分のレベルに合わせて選択できるため、学習者の助けとなった。日本語Ⅳは再履修が認められており、再履修者と進級者のレベル差が常に問題となる。全学コースのつながりも考慮したレベル設定と教材の選定が課題である。

(星 摩美)

#### 《まとめ》

受講登録者数は前年度の59名から83名へと大幅に増加した。特に前期が28名から46名へと増加したことが顕著であった。その背景の分析はできていないが、これを一時的な復調に終わらせることがないように努めていきたい。また、日本語Ⅳの授業のあり方については再検討が必要である。

## 4. 日本語能力試験対策講座

### 《前期》

#### ① N1 対策クラス

- ・受講者：24名（中国16、マレーシア7、台湾1）
- ・授業時間：2コマ/週 総コマ数：30コマ
- ・担当教員：小野知恵美
- ・コーディネーター：山中和樹

#### 1) 教材

- ・『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN1文法』（アスク出版）
- ・『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN1語彙』（アスク出版）
- ・『新完全マスター読解・日本語能力試験N1』（スリーエーネットワーク）
- ・『新完全マスター聴解・日本語能力試験N1』（スリーエーネットワーク）
- ・『日本語能力試験 模試と対策 Vol.2』（アスク出版）
- ・『あなたの弱点がわかる！日本語能力試験N1模試』（UNICOM）
- ・『ゼットイ合格！日本語能力試験完全模試N1』（Jリサーチ出版）
- ・『日本語能力試験 スーパー模試N1』（アルク）

#### 2) 授業方法

4月の中旬から週2コマの授業を行い、6月の土曜日に2回、模擬試験と解説を行った。メインテキストとして、『日本語総まとめ』シリーズの語彙、文法を使用し、それぞれ1日目～6日目を毎週の宿題とし、授業で宿題の範囲のチェック問題を解き、解説を行った。読解、聴解は、『新完全マスター』シリーズから試験の問題形式ごとに練習問題を取り上げた。読解は主に宿題にし、回収してチェックした後に解説を行った。

語彙、聴解は毎回、文法と読解は隔回で取り上げるようにした。

#### 3) 評価と課題

団体受験に申し込んだ24名と、7月の試験は受験しない学生4名が講座に登録し、5月の前半までは20名程度が受講していたが、継続して受講したのは16名程度だった。能力試験を受験したのは22名で、10名が合格した。

レベルや苦手分野、対策を強化したい科目も様々で、また週1回しか出席できない学生もいるため、できるだけ受講生全員がすべての項目を練習できるようカリキュラムを進めた。また、特に練習したい科目がある希望者には、練習問題をコピーして渡した。

今回、不合格者の半数が、合格まであと数点以内で、惜しまれる結果が多かった。対策の内容を充実させるとともに、1問、1点でもあきらめない、落とさないという受験生の貪欲さも必要だと感じた。次回に向けさらに対策を続け、合格を目指してほしい。

（小野知恵美）

## ② N 2 対策クラス

- ・ 受講者：28名（中国22名、インドネシア1名、オーストリア1名、韓国1名、台湾1名、ドイツ1名、マレーシア1名）
- ・ 授業時間：2コマ/週 合計30コマ（4月～7月 1回4コマの模擬試験2回を含む）
- ・ 担当教員：星 摩美

### 1) 教材

#### ○主教材

- ・ 『日本語総まとめ N 2 文法編』（アスク出版）
- ・ 『日本語総まとめ N 2 語彙編』（アスク出版）

#### ○副教材

- ・ 『完全マスター 読解 日本語能力試験N 2』（スリーエーネットワーク）
- ・ 『完全マスター 聴解 日本語能力試験N 2』（スリーエーネットワーク）
- ・ 『日本語総まとめ N 2 文字編』（アスク出版）
- ・ 『日本語総まとめ N 2 聴解編』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験 N 1・N 2 試験に出る読解』（桐原書店）

#### ○模擬試験教材

- ・ 『日本語能力試験 N 2 模試と対策 vol.1』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験 N 2 模試と対策 vol.2』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験 公式問題集N 2』（凡人社）
- ・ 『合格できる日本語能力試験N 2』（アルク）
- ・ 『日本語能力試験N 2 模擬』（ユニコム）

### 2) 授業方法

初回で、試験科目や内容等についてオリエンテーションを行い、聴解、読解についてどのような形式のものができるか、どのようなスキルが必要かを体験した。2日以降1回目模擬テストまでは語彙、文法を隔週で授業の半分を使って行い、残りの時間を聴解、読解にあてた。1回目模擬試験後は、比較的点数が低かった文法と読解を中心に練習を行い、2回目模擬試験から本試験までは、読解のスピードを上げるために速読することを中心に行った。各科目の進め方としては、語彙と文法は主教材を宿題として課し、授業ではチェックテストを行い、解説した。聴解は前半で会話独特の表現を中心に扱い、後半は問題形式になれるように授業を進めた。読解は短い文章で、日本語の文の構造と、速読の方法を前半で扱い、徐々に長いものを扱うようにした。また、非漢字圏の学生には希望者に宿題として漢字の教材を配布した。

### 3) 評価と課題

開講当初から受講生が多かったが、皆非常に熱心で、うち7名は90%程度の出席率だった。模擬試験受験者は1回目が19名、2回目は22名が受験した。2回目成績では、ほぼ全員が50%以上の成績を上げていた。今学期はレベル的にN 2を目指すのに適切な受講生が集まっており、シラバス通りに進めることができた。しかし、人数が多く、一人一人のニーズに合わせるようきめ

細やかなケアはできなかった。

(星 摩美)

## 《後期》

### ① N1 対策クラス

- ・受講者：12名（中国9、マレーシア2、インド1）
- ・授業時間：2コマ/週 総コマ数：30コマ
- ・担当教員：小野知恵美
- ・コーディネーター：山中和樹

#### 1) 教材

- ・『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN1 文法』（アスク出版）
- ・『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN1 語彙』（アスク出版）
- ・『新完全マスター読解・日本語能力試験N1』（スリーエーネットワーク）
- ・『新完全マスター聴解・日本語能力試験N1』（スリーエーネットワーク）
- ・『日本語能力試験 模試と対策 Vol.2』（アスク出版）
- ・『あなたの弱点がわかる！日本語能力試験N1 模試』（UNICOM）
- ・『ゼッタイ合格！日本語能力試験完全模試N1』（Jリサーチ出版）
- ・『日本語能力試験 スーパー模試N1』（アルク）

#### 2) 授業方法

9月の中旬から週2コマの授業を行い、11月の土曜日に2回、模擬試験と解説を行った。メインテキストとして、『日本語総まとめ』シリーズの語彙、文法を使用し、それぞれ1日目～6日目を毎週の宿題とし、授業で宿題の範囲のチェック問題を解き、解説を行った。読解、聴解は、『新完全マスター』シリーズから試験の問題形式ごとに練習問題を取り上げた。読解は宿題にし、回収してチェックした後に解説を行った。各科目とも、受講生の習得具合や希望に合わせた項目の練習問題を繰り返した。

#### 3) 評価と課題

今回、講座に登録したのは17名で、団体受験申込者以外に、来日が団体申し込み間に合わなため個人受験となった学生、N1合格者だが、日本語力向上のため受講した学生など、様々な受講生がいた。毎回の授業の出席者は4、5名で、週2日とも受講できたのは2名（個人受験の学生）だった。能力試験を団体受験したのは10名で、2名が合格した。後期は継続して受講できた学生が少なく、合格者が少なかった一因であると考えられる。講座開始時に受講希望者が揃わず、受講可能時間の調査が十分にできなかったことが反省点であるが、授業やゼミだけでなく、研究発表などと重なった学生も多かった。開講時間を受講生に合わせるのにも限りがあるが、対策講座がより役立つよう、できる限り多くの学生が出席できる時間に調整できればと思う。

(小野知恵美)

## ② N 2 対策クラス

- ・ 受講者：3名（中国1名、韓国2名）
- ・ 授業時間：2コマ/週 合計30コマ（9月～12月 1回4コマの模擬試験2回を含む）
- ・ 担当教員：星 摩美

### 1) 教材

#### ○主教材

- ・ 『日本語総まとめ N 2 文法編』（アスク出版）
- ・ 『日本語総まとめ N 2 語彙編』（アスク出版）

#### ○副教材

- ・ 『完全マスター 読解 日本語能力試験N 2』（スリーエーネットワーク）
- ・ 『完全マスター 聴解 日本語能力試験N 2』（スリーエーネットワーク）
- ・ 『日本語総まとめ N 2 文字編』（アスク出版）
- ・ 『日本語総まとめ N 2 聴解編』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験 N 1・N 2 試験に出る読解』（桐原書店）

#### ○模擬試験教材

- ・ 『日本語能力試験 N 2 模試と対策 vol.1』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験 N 2 模試と対策 vol.2』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験 公式問題集N 2』（凡人社）
- ・ 『日本語能力試験スーパー模試N 2』（アルク）
- ・ 『日本語能力試験N 2 模擬』（ユニコム）

### 2) 授業方法

初回で、試験科目や内容等についてオリエンテーションを行い、聴解、読解についてどのような形式のものができるか、どのようなスキルが必要かを体験した。2回目以降1回目模擬テストまでは語彙、文法を隔週で授業の半分を使って行い、残りの時間を聴解、読解にあてた。1回目模擬試験後は、比較的点数が低かった文法と読解、聴解の即時応答問題を中心に練習を行い、2回目模擬試験から本試験までは、読解のスピードを上げる練習と聴解の概要理解問題を中心に行った。各科目の進め方としては、語彙と文法は主教材を宿題として課し、授業ではチェックテストを行い、解説した。聴解は前半で会話独特の表現を中心に扱い、後半は問題形式になれるように授業を進めた。読解は短い文章で、日本語の文の構造と、速読の方法を前半で扱い、徐々に長いものを扱うようにした。また、今回は非漢字圏の学生が過半数であったため、語彙指導の際にも、漢字の意味理解に配慮して授業を行った。

### 3) 評価と課題

受講生は3名と非常に少数であったが、皆非常に熱心で、毎回の課題をきちんとやって出席していた。非漢字圏の学習者と漢字圏の学習者では、問題のあるところが異なったが、受講生が少なかったため、各個人の特徴に合わせて、きめ細やかな指導をすることが出来た。受講生のうち1名は初級後半の学習を終了しておらず、表現を導入しながらの指導も行った。（星 摩美）

## 《まとめ》

昨年度から前期のN-1コースの受講者が多く、当初教室がほとんど満席になったが、継続して受講したものは16名程度だったので、教室変更の必要はなかった。ただ、来期以降も同様の問題が発生する可能性はある。受講者が増えれば、国際交流センターの教室では収容しきれないので、大学のその他の教室を使用することになる。国際交流センター主催の日本語能力試験対策講座受講生は能力試験の団体申込みを前提にしているが、後期のN-1コースには団体受験申し込みを締め切ってから、受講を希望した学生が4名、N-2コースに1名いた。後期に個人受験者が多くなるのは次の理由による。後期の日本語能力試験対策講座の案内は8月上旬に発表し、講座は9月上旬にスタートする。10月には交換留学生在が多数、入学してくる。これらの学生の中にも受講を希望する者がいるが、団体受験の申し込み手続きは9月下旬に締め切らないと、出願に間に合わない。そういうわけで、これらの学生は個人受験をせざるを得なくなる。個人受験の学生にも結果を知らせるように要請しているが、なかなか把握しきれない。そこで、受験結果は団体受験申込者に限っている。N-1については前期の合格率は高かったが、後期はかなり低くなった。受講者のレベルは前年度と比べても、劣っていたとは思えないので、前記の問題の方が易しく、後期の方が難易度は高かったものと推察される。2014年度の日本語能力試験の受験結果は次のとおり。

		対策講座受講者数	日能試団体受験者数	合格	不合格
前期	N-1	24	22	12	10
	N-2	25	25	19	6
後期	N-1	12	11	2	9
	N-2	2	2	2	0

(山中和樹)

## 5. 共通教育科目・日本語日本事情科目

### 《概要》

2014年度、センター教員は、センター開講科目以外に、共通教育センターが開講する基礎教育科目・外国語科目としての日本語科目と、教養教育副専攻科目の日・中言語文化系及び日本語・日本文化系科目を担当した。2014年度の開講科目は以下の通りである。

### 《2014年度 開講科目一覧》

科目	開講時間	単位	担当教員
日本語科目			
日本語A	前期火4	2	山中和樹
日本語B	後期火4	2	膽吹 覚
日本語C	前期火3	2	桑原陽子
日本語D	後期火3	2	山中和樹
日本語E	前期火4	2	桑原陽子
日本語F	後期火4	2	山中和樹
日本語G	前期火3	2	膽吹 覚
日本語H	後期火3	2	桑原陽子
日・中言語文化系 日本語・日本事情系科目			
応用日本語Ⅰ	前期月2	2	山中和樹
応用日本語Ⅱ	後期月1	2	山中和樹
日本の文化	前期木1	2	膽吹 覚
日本事情A	前期火1	2	膽吹 覚
日本事情B	後期火2	2	膽吹 覚
多文化コミュニケーションA	後期木1	2	小幡浩司
多文化コミュニケーションB	前期木1	2	小幡浩司
多文化コミュニケーションC	前期火1	2	小幡浩司

### <日本語>

【受講生】16名（学部学生1名、科目等履修生1名、特別聴講学生14名）

### 【目標】

速読により、内容把握ができるようにするとともに、文型・会話の練習を行い、コミュニケー

ション能力の向上を図る。

【教材】プリント（『日本語中級用 速読文化エピソード』より）

【方法】

1日に1課のペースで進行した。まず、進出語彙の解説をする。その後、黙読により内容把握をさせたあとで、一文ずつ、交代に学生に音読させ、学生の問題点（漢字の読み、発音等）をチェックした。その後、文法その他の重要項目の説明を行った後、練習問題や会話練習を行った。

【評価と課題】

この授業は短期プログラムの「日本語中級」との共同授業である。学部学生は非漢字圏の出身だが、漢字の読みも含めた読解力、読む速度も漢字圏の学生に比べても見劣りはしなかった。読解だけではなく、出身国の事情を紹介させるなど、対話も取り入れ、他の学生が読解以外の能力を発揮できるように工夫した。おおむね出席状況もよく、授業態度もまじめであった。

（山中和樹）

#### <日本語B>

【受講生】8名（学部学生1名、特別聴講学生6名、科目等履修生（日研生）1名）

【目標】日本語中級レベルの留学生を対象として、日本語の会話力の向上を図る。

【教材】『マンガで学ぶ日本語会話術』（アルク）

【方法】

- ・第1～35課（全50課）まで行なった。教科書に従って、「マンガ」（CD）—解説—「練習」の順に進めた。
- ・成績および評価 期末試験の結果を起訴して、授業中の発話などを考慮して、総合的に評価した。

【評価と課題】

受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、定期試験の結果を見る限り、当初の授業目標は達成できたと判断してよいであろう。テキストも親しみやすく、受講生からの質疑も活発であった。

（膽吹 覚）

#### <日本語C>

【受講生】15名（学部学生4名、特別聴講学生7名、科目等履修生1名、聴講生（3年編入）3名）

【目標】メールの書き方を学ぶ

【教材】『中級からの日本語プロフィシエンシーライティング』（凡人社）

【方法】

- ・教科書に沿って、メール執筆に必要な表現や文型を学ぶ。ほぼ毎回、メールを書く課題を出した。課題は合計13回であった。
- ・1回の課題（10点）の10回分の合計で成績を算出した。11回以上提出した場合は、点数のよいものから10回分を評価対象とした。

【評価と課題】

授業態度は非常に良好であった。典型的なメールの表現を学ぶにつれて、整ったメールを書く力がついた。(桑原陽子)

<日本語D>

【受講生】 6名（学部生2名、特別聴講学生2名、科目等履修生2名）

【目 標】

- ・ 擬音語・擬態語や助詞の使い分けなどに関するテーマの文章を読んで初級のまとめをし、それらを実際の作文で使用できるようにする。

【教 材】 プリント教材

【方 法】

- ・ 平均すると、大体2～3コマに1課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。
- ・ 成績評価：中間試験（50%）、期末試験（50%）

【評価と課題】

- ・ 6名の学生のうち、漢字圏は2名で、4名は非漢字圏である。漢字圏の学生であっても、正確に漢字が読めないこともあるので、漢字の読みのプリントを全員に配布した。教材は、雑誌からの抜粋の生教材で、非漢字圏の学生にとっては読解がかなり困難だと思われたので、読解の授業にはしていない。多くの例を提示し、具体例に即して、本文の解説をした。教材に現れる例文のみ学生に読ませたが、非漢字圏の学生がハンディを感じさせることはあまりなかった。成績はおおむね良好だった。出席と授業態度は良好で、無遅刻・無欠席の学生は2名。他の学生もほぼ無欠席だった。一昨年度まで、中級レベルに届かない特別聴講学生が履修していたので、漢字に限らず、授業のスピードや試験問題の難易度は落とさざるを得なかったが、今期の特別聴講学生は全員中級レベルに達していたので、そのような配慮は不要だった。

(山中和樹)

<日本語E>

【受講生】 13名（学部生3名、特別聴講学生10名）

【目 標】 様々なタイプのスピーチの方法を学び、わかりやすく伝えられるようになる。

【教 材】 プリント教材

【方 法】

- ・ 4種類のスピーチを行った（方法説明、情報提供、意見、提案）。提案のスピーチは、パワーポイントを使ったプレゼンテーションである。受講生もお互いに評価を行った。
- ・ 情報提供（25%）、意見（30%）、提案（40%）の3つのスピーチと、授業への参加度（5%）を総合して評価した。

**【評価と課題】**

授業態度は非常に良好であった。最後のプレゼンテーションの内容の質の向上のためにどのような指導を行うかが今後の課題である。(桑原陽子)

**<日本語F>**

**【受講生】** 15名 (学部学生1名、特別聴講学生13名、科目等履修生1名)

**【目標】**

- ・「テ形」と連用中止の使い分け、「は」と「が」の使い分け、「のである」文の用法、「んですから」の適切な用法などを学習し、それらを実際の作文で使用できるようにする。

**【教材】** プリント教材

**【方法】**

- ・平均すると、大体2～3コマに1課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認を行った。
- ・成績評価：中間試験(40%)、期末試験(60%)

**【評価と課題】**

本文にはルビがふっていないが、非漢字圏の学生も上級レベルに達しているため、ルビの必要性は感じなかった。「は」と「が」の使い分けの応用問題として、出身国の昔話を書かせたが、使い分けは十分満足できるものであった。全員、学習意欲も高く、授業態度も良好であった。思っていた以上に学生のレベルが高かったため、予定していた教材のほかの教材も追加した。成績もおおむね良好であった。(山中和樹)

**<日本語G>**

**【受講生】** 18名 (学部学生4名、特別聴講学生13名、科目等履修生(日研生)1名)

**【目標】**

- ・日本語で書かれた新聞記事をトピックスとし、それについて日本語でディベートすることを通して、日本語による会話能力を涵養する。

**【教材】** 「be-between」(朝日新聞)

**【方法】**

- ・教員主導によるトピックスの読解(1コマ)を行った後、グループ(5名1組)に分かれてディベートの役割とグループとしての戦略を協議(1コマ)し、その後、ディベートを実施した。ディベートはすべてビデオに録画し、学生指導とその評価とに使用した。
- ・成績評価：計5回のディベートを総合的に評価した。

**【評価と課題】**

受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、ディベートも回を重ねるごとに上達した判断される。グループでの協議に教員が如何に関わるかは、アクティブ・ラーニングの観点からは正の余地があると考えている。(膽吹 覚)

### <日本語H>

【受講生】16名（学部学生1名、特別聴講学生15名）

#### 【目標】

インターネットサイトのニュース、新書から時事問題を取り上げ、関連語彙・表現を学び効率よく読む技術を身につける。特に、予測して読む力をつけることを重視する。さらに、授業中に読んだ素材を要約する、複数記事の相違点を比較するなどレポートとしてふさわしい文章を作成する。

【教材】プリント

#### 【方法】

具体的な読みの技術を提示して、生の素材を読む練習を行った。読解記事の要約、書き換え等の課題を課し、書く訓練を行った。大学生活に必要なメールの書き方も学習した。レポート課題（各10点 自由提出・13回）のうち得点の高い10回分を評価対象とした。

#### 【評価と課題】

授業態度は非常に良好だった。書く力を伸ばすには時間が不十分な学習者もあり、授業時間外の指導が必要であった。

### <日本事情A>

【受講生】23名（学部学生6名、特別聴講学生16名、科目等履修生（日研生）1名）

#### 【目標】

日本語中上級レベルの留学生を対象として、『越前若狭いろはかるた』を教材として、主に福井県北部に関する地誌、歴史、文学、文化について理解を深める。

【教材】『越前若狭いろはかるた』（ふくい文化研究会）

#### 【方法】

- ・前半は教員が『越前若狭いろはかるた』に取り上げられた福井県嶺南地方の事項について講義し、後半は受講生が自ら調査したことを、パワーポイントを使って、日本語でプレゼンテーションを行った。
- ・成績および評価 レポートとプレゼンテーションを基礎として、授業中の取り組みなどを考慮して、総合的に評価した。

#### 【評価と課題】

受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、プレゼンテーションもバラエティーに富み、活発に行なわれた。また、現地での実地調査を踏まえた発表が多く、学生の主体的な学習が進められたと判断する。（膽吹 覚）

### <日本事情B>

【受講生】25名（学部学生7名、特別聴講学生17名、科目等履修生（日研生）1名）

**【目 標】**

日本語中上級レベルの留学生を対象として、『越前若狭いろはかるた』を教材として、主に福井県北部に関する地誌、歴史、文学、文化について理解を深める。

**【教 材】**『越前若狭いろはかるた』（ふくい文化研究会）

**【方 法】**

- ・前半は教員が『越前若狭いろはかるた』に取り上げられた福井県北部の事項について講義し、後半は受講生が自ら調査したことを、パワーポイントを使って、日本語でプレゼンテーションを行った。
- ・成績および評価 レポートとプレゼンテーションを基礎として、授業中の取り組みなどを考慮して、総合的に評価した。

**【評価と課題】**

受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、プレゼンテーションもバラエティーに富み、活発に行なわれた。ただ、冬季ということもあって、現地での調査が困難なケースもあり、この点は今後の課題である。 (膽吹 覚)

**<日本の文化>**

**【受講生】**27名（学部学生10名、特別聴講学生16名、科目等履修生（日研生）1名）

**【目 標】**・マンガを楽しみながら日本人の考え方や季節感、現代日本の家族について学ぶ。

**【教 材】**『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化』（アルク）

**【方 法】**

- ・教科書にそって講義形式で進めた。確認問題と応用問題は授業に行った。
- ・成績評価：期末試験（100%）

**【評価と課題】**

- ・マンガを教材とすることで受講生の興味関心をひくことができた。また、受講生からの質問も活発で、積極的な授業参加が行われた。 (膽吹 覚)

**<多文化コミュニケーションA（異文化コミュニケーションA）>**

**【受講生】**21名（中国12名、ベトナム1名、日本8名）

**【授業時間】**1コマ/週 総コマ数：15コマ **【担当教員】**小幡浩司

**1) 目標**

文化の諸要素や特性について概観し、今日の多文化共生時代におけるコミュニケーションのあり方、およびその役割について探求する。授業で取り上げるトピックの具体的事例について行なうディスカッションやその他グループワークを通して、異文化理解、多文化コミュニケーションを実践する。

## 2) 方法

### (1) 授業内容

授業は、配布資料をもとに、講義、及びディスカッションからなる。学習内容は、①アサーティブコミュニケーション、②文化の特徴、③日本文化と宗教、④世界の宗教、⑤時間と空間の認識、⑥異文化接触、⑦多文化共生、など。

### (2) エッセイ

エッセイトピックは、「マイナスマニエーションとプラススマニエーション」、「アサーティブコミュニケーション」、「マジック、神話的、記号的、それぞれの意識と世界観」、「コミュニケーションと文化の関係性」など

### (3) 成績及び評価

成績は、出席率を満たすことを前提とし、下記①～④から総合的な評価を行った。

- ①中間試験 (Take Home Exam)
- ②期末試験① (Take Home Exam)
- ③期末試験② (In Class Essay)
- ④授業に対する積極的参加

## 3) 評価と課題

中間・期末のいずれの試験もエッセイ問題とし、事例を用いて、自分の意見や主張を論理展開することを学生に求めた。留学生にとってはさらにハードルの高い挑戦であったが、時間をかけてしっかり課題をこなしてくれていたように思う。日本人が4割、留学生が6割であったため、ディスカッションやグループワークを取り入れ、日本人学生と留学生が協働する状況を多く作り出す努力をした。反省点は、時間の関係で、パワーポイントを使ったグループ・プレゼンテーションを実現できなかったこと。今後はこの点に注意したい。(小幡浩司)

## <多文化コミュニケーションB (異文化コミュニケーションB)>

【受講生】28名(中国5名、マレーシア4名、台湾2名、ベトナム1名、日本16名)

【授業時間】1コマ/週 総コマ数:15コマ 【担当教員】小幡浩司

### 1) 目標

人はコミュニケーションから逃れることは出来ない。また、コミュニケーションは自文化の影響から逃れることは出来ない。したがって、異なる文化背景を持つ人々のコミュニケーションにおいては、まず自文化の特性、次いで相手の異文化の特性、さらにコミュニケーションに及ぼす文化の影響を理解することが必要である。

この授業では、文化、およびコミュニケーションについて基礎的理論を概観するとともに、具体的事例を通して、異文化コミュニケーションに必要な態度、およびコミュニケーションスタイルについて議論し、その理解を深める。

## 2) 方法

### (1) 授業内容

授業は配布資料をもとに講義、ディスカッションから成る。学習内容は、①文化と多文化世界、②自文化とコミュニケーション、③自文化中心主義と文化相対主義、④非言語コミュニケーション、⑤言語コミュニケーション、⑥ステレオタイプ、偏見、差別、⑦コミュニケーションと異文化理解、⑧グローバリゼーションとアイデンティティ、など

### (2) エッセイ

エッセイトピックは、「自己とアイデンティティ」、「ステレオタイプ、偏見、そして差別」、「異文化への憧れ」、「文化の対立」、「異文化の対話」、「あなたの国の文化的特徴」、「異文化適応と異文化受容」など

### (3) 成績及び評価

成績は、出席率を満たすことを前提とし、下記①～④から総合的な評価を行った。

- ①中間試験 (Take Home Exam)
- ②期末試験① (Take Home Exam)
- ③期末試験② (In Class Essay)
- ④授業に対する積極的参加

## 3) 評価と課題

文化の特徴をさらに掘り下げて議論した。異文化への憧れ、そして、文化の「重い」側面である異文化間対立などのトピックでは、学生のディスカッションがかなり活発に展開された。エッセイにおいては、文章力、クリティカルシンキング、そして論理展開力が弱いと改めて感じた。反省点は、授業において講義が多くなってしまったことである。もう少し、資料や映像を用いて、ディスカッションをする時間を増やすなど、学生達による能動的な学びのチャンスを作るべきであったと考える。(小幡浩司)

## <多文化コミュニケーションC (異文化コミュニケーションC)>

【受講生】16名(中国4名、台湾3名、ベトナム1名、日本8名)

【授業時間】1コマ/週 総コマ数:15コマ 【担当教員】小幡浩司

### 1) 目標

多文化(異文化)コミュニケーションのゴールは、多文化共生、多種多様な文化の平和的な共存である。しかし、国境を越えて多面的な交流が急速に進む今日のグローバル化時代においては、文化の画一化と、社会の二分化が深刻な問題として指摘されている。

この授業では、グローバリゼーションを概観すると同時に、異文化コミュニケーションが文化の衝突を回避し、多様な文化の維持とその共存を可能にし、より平和な世界を構築するために果たすその役割と可能性について探求する。

## 2) 方法

### (1) 授業内容

授業は配布資料をもとに講義、ディスカッションから成る。学習内容は、①グローバリゼーションの特徴、②画一化と多様性、③二分化、③グローカリゼーション、④コミュニケーションの役割、⑤異文化理解、⑥偏見と差別、⑦多文化共生社会の実現、など

### (2) エッセイ

エッセイトピックは、「グローバリゼーションと文化」、「グローバリゼーションのメリットとデメリット」、「地球村とアイデンティティの危機」、「グローバル人材とは?」、「企業の国際化」、「グローバリゼーションと国家の退場」、「アサーティブコミュニケーション」など

### (3) 成績及び評価

成績は、出席率を満たすことを前提とし、下記①～④から総合的な評価を行った。

①中間試験 (Take Home Exam)

②期末試験① (Take Home Exam)

③期末試験② (In Class Essay)

④授業に対する積極的参加

## 3) 評価と課題

(1) 配布資料を多くし、予習 (reading assignment) をして講義に臨むような授業形態を試みたが、十分に浸透させることができなかったことは反省点である。

(2) トピックによっては、質の高いエッセイが提出された。論理展開、エビデンスベース、クリティカルシンキングと、努力の後が見られる。しかしながら、授業内でのエッセイについてはエッセイの質が落ちる傾向にある。学生がそのような力を養うことが出来るよう授業の改善を試みる。  
(小幡浩司)

## <応用日本語 I >

【受講生】 31名 (学部学生 9名 特別聴講学生 22名)

### 【目 標】

日本経済新聞掲載「仕事常識」を通して、日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養うとともに、語彙力、理解力、表現力の向上を図る。

【教 材】 日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント

### 【方 法】

導入として、新聞記事の黙読を行い、大意を把握させた。次に、教師が音読した。それから、学生に1文ずつ、順番に音読させた。その後、新しい文法事項や発音の問題点などを解説し、本文の内容質問等を行った。各回1つの記事を読み切り、次回にその内容に対する試験(記述試験)を実施した。試験については実施の次週に採点返却し、解答例を配布した。

【評価と課題】

成績評価は、中間試験（筆記による電話対応）、期末試験（筆記）、毎回の復習テストを総合評価して行った。配分は中間試験50%、期末試験30%、復習テスト20%である。出席はおおむね良好だった。授業態度も良好だった。電話対応や名刺交換の実地練習は人数が多かったので、実施できなかった。細かい指導を行えなかったことが残念である。例年、特別聴講学生等の非正規のほうが学部生より熱意を持って受講しているが、今年は学部学生も非正規生に劣らぬ試験結果を出すことができた。

(山中和樹)

<応用日本語Ⅱ>

【受講生】27名（学部学生12名、特別聴講学生15名）

【目標】

最近の代表的なテレビドラマを通して、日本の社会、精神風土を理解すると同時に、微妙な気持ちの表現方法を学ぶ。また、教科書で学んだ日本語の応用形である、短縮形、短縮表現、音便等の理解運用力を養う。

【教材】テレビドラマDVD「僕の生きる道」全11話（各45分）

【方法】

1コマで1話を学習する。まず、DVDを見て、ストーリーの概略を把握させる。次に、シナリオを配布して、理解内容、表現等を確認練習する。毎回、前回の感想及び自国との相違に関するレポートを提出させる。レポートは翌週、チェックした上で返却する。

最初の1コマはガイダンスに当てた。DVDは全11話であるが、1話を1コマで見る。DVDを見た後、その回のスクリプトを配布する。時間終了まで、スクリプトの解説をするが、どうしても時間が足りない。それで、3話続けて見たあと、3話分のスクリプトの説明の残りを1コマ使って行く。このようにして、スクリプトの説明で3コマ使った。

【評価と課題】

・毎回のレポート（55%）と期末試験（45%）により、評価した。まじめに出席し、かつ、課題も提出していた学生の成績は十分満足の行くものであった。おおむね出席率は良好であった。ほとんどの学生は課題を毎回きちんと提出していたが、提出のほとんどない学生もいた。後期（冬学期）の1限ということもあり、遅刻がちの学生もいた。スクリプトはビデオを見た後、解説した。会話表現のため、文法的に難しい文はなかったが、会話独特の表現で教科書ではなじみのないものを重点的に解説した。一昨年度は、一部私語の目立つ学生がいたので、私語防止のため、同じ国の学生が前後左右にならないように、昨年度から座席を指定している。このため、私語はほとんどなかった。本ドラマは高視聴率を記録した人気ドラマで、学生にも好評であった。

(山中和樹)

《まとめ》

例年通り、学部学生よりも特別聴講学生、科目等履修生の受講人数のほうが多く、学習者のニ

ーズに合わせて授業内容を工夫する必要がある。その結果、たとえば、今年度後期の上級クラスでは、ディベートのクラスとプレゼンテーションのクラスが同時開講されるなど、共通教育の日本語科目全体のバランスに問題があった。そのため、読む、書く、聞く、話す、の4技能のバランスと学習者のニーズを考慮し、2015年度からの授業内容を検討し決定した。 (桑原陽子)

## 6. 福井大学博士人材キャリア開発支援センター

### 《2014年度後期》

- ・留学生向け日本語学習（単位認定無）
- ・受講者：留学生研究員4名（中国3名、イラン1名）・日本人研究員2名
- ・授業時間：2時間／週 全10回 20時間（10月～12月）
- ・担当教員：星 摩美

#### 1) 目標

- ・就職活動を行う際に必要な自己表現をするための日本語力の育成
- ・日本企業の中で仕事を行う際に必要な日本語力と異文化適応能力の育成
- ・企業の中で自立的に日本語を学んでいく力の育成

#### 2) 教材

主教材『ロールプレイで学ぶビジネス日本語』スリーエーネットワーク。ほか自主作成教材等

#### 3) 授業方法

日本企業文化の理解促進と日本語運用力向上のための活動を日本人研究員とともに協働で行い、対話を通して振り返り、修正を行うことができるよう授業を計画した。就職活動中は自己を振り返り、適切に自己表現することが求められるが、その自己表現を日本人研究員とともにを行い、お互いに評価し合い、学びあえる活動を多く持った。また、企業文化の理解促進では、文化摩擦を起こした事例から、話し合いを行い、自分自身のスタンスを見出していく活動を行った。その他、就職活動の場面でのEメールのやり取り、電話での会話などを扱った。

#### 4) 評価と課題

今回の受講生は積極的に協働の活動に参加し、成果を残すことができた。お互いの自己表現を評価しあい、学びあえる人間関係が出来上がっており、受講生によってレベル差もあったが、協働の学習の場から受講生が個々のレベルに応じた学習効果を上げることが出来た。やはり、これから自分が遭遇すると考えられる問題や課題に対しては非常に熱心に取り組んでおり、実際に日本語を使用する場面、課題を設定し、使用する機会を作る工夫が重要であると感じた。今学期、企業文化の理解促進で取り上げた文化摩擦の事例は、現実には博士課程を修了した受講生が遭遇する場面とは考えにくいものも多く、取り上げる事例を実際の場面により近づける工夫が必要である。そのためには、このコースを修了した修了生への調査等が必要である。（星 摩美）

## 7. さくらサイエンスプラン・初等日本語講座

- ・ 開講期間：2014年12月7日～2014年12月13日
- ・ 日本語科目開講日時：2014年2月10日 1、2限（合計2コマ）
- ・ 受講者：10名（西安理工大学さくらサイエンスプラン参加学生。全員日本語未習。）
- ・ 担当教員：桑原陽子（通訳者3名）
- ・ 講座内容

### （1）初等日本語講座1：「ほめる」の日中比較—本当はおいしくない—

社会言語学の研究成果から、「自分のために作ってくれた料理がおいしくなかった時にどうするか」という身近な状況を使って、日中の言語行動の類似点・相違点について講義を行い、議論した。（通訳者：教育学研究科交換留学生 張姝雅、古效婷）

### （2）初等日本語講座2：入門日本語

簡単な日本語の自己紹介ができるようになることと、「おいしい」「高い」「寒い」など簡単な形容詞を学び、感想が言えるようになることを目指して、会話練習を行った。（通訳者：短期留学プログラム交換留学生 姜穎）

評価：1週間という短期滞在のプログラムの中の2時間分の講義であることを考え、負担なく楽しめることを重視した。特に、（1）の講義は、非常におもしろい議論に発展させることができた。ただし、それには言語学（日本語学）専攻の中国人留学生（大学院生）の通訳が欠かせなかった。

（桑原陽子）